

ブックレビュー

●文献—鋼管技術発展史●

今井宏著・発行，1994年11月
 問合せ先：TEL (03) 3209-5575
 B 5 判 462頁，定価4,000円

本書は、表題が示すように、鋼管の製造技術に関する歴史的に重要な文献を翻訳して配列することにより、鋼管技術の進歩の跡をたどろうとするものである。編者は、長年企業にあって鋼管分野一筋に過ごされた方である。これまでに多くの文献を収集し、それらをもとに鋼管技術史をまとめようとしていたが「70歳を超えた自分の年齢を考えると、当初の構想通りの完結は難しくなっていることに気付いた。」(本書まえがき)ので、文献だけでも翻訳して紹介しようと思ひ立ち、本書を出版されたそうである。その構成は、木管の話から始まり、鉛管、鋳鉄管、銅・真鍮管、鍛接鋼管、継目無鋼管、溶接鋼管、大径溶接鋼管という順序に文献が配列されているが、その記述の大部分は鋼管関係に費やされている。また、随所に丁寧な補注が編者によって挿入されている。現在入手困難な文献も含まれており、その意味でも貴重な書物である。文献の翻訳集と言うことで、無味乾燥なものではないかと思いつつ、カバーのマンネスマン法とステイーフェル法の特許図面に興味を引かれて読み始めたが、掲載図面や文章の端々に、原論文が書かれた時代背景や雰囲気などが想像されて、すぐれたノンフィクションを読むようなおもしろさを感じられた。

技術の先端で、日常的に研究開発に忙殺されていると、自分自身がよってたつべき基盤を見失いがちであるが、そのようなときに技術の発展の歴史を振り返ることは有用なことであろう。なにかに行き詰まったときには「原点に返れ」とよく言われる。本書は、鋼管製造に携わる技術者ばかりでなく、広く塑性加工に関係する技術者研究者にとって、なにかに行き詰まっているかどうかは別にして、自らが関係する技術分野の、搖籃期からの発展の歴史を追体験できる、貴重な書物であるといえる。鋼管関係の技術、あるいは広く塑性加工を学ぶための教科書に相当するものは多数出版されており、それらは、現在の完成された学問や技術の体系を洗練された姿で提供してくれる。しかし、それらの体系が現在の姿になるまでの紆余曲折を経た困難に満ちた過程を知る機会は少ない。そのような過程の一部を本書によって追体験することは、初学者にとっても得難い経験になるのではないかと思う。

(大阪大学工学部 左海哲夫)

●ステンレス鋼便覧—第3版—●

ステンレス協会編，1995年1月
 日刊工業新聞社発行 (TEL (03) 3222-7084)
 B 5 判 1,573頁，定価53,000円，特別価格 (平成7年6月まで) 48,000円 (ともに消費税込み)

1973年に「ステンレス鋼便覧」(第2版)が出版されて以来約20年が経過したが、この間におけるステンレス鋼製造技術の進歩は著しく、また応用面においても多様な用途に供されるようになってきた。我々の身の回りを見渡してもエレベーターのドア、階段手すり、屋根材などの建築部材、ステンレスカー、家庭用・厨房用品など20年前に比べるとステンレス鋼製品を目にする機会は格段に多くなっている。工業分野においては高純度化・清浄化などによる品質向上に支えられて用途拡大が進む一方、ステンレスクラッド鋼、制振鋼板、カラーステンレス鋼板、ステンレス箔、極細線など新しい製品が広く使用されるようになってきている。

このような発展に対応する新しい便覧の出現が待望されていたが、このほど、ステンレス協会創立30周年記念行事の一環として「ステンレス鋼便覧」第3版が刊行された。改訂にあたっては、約70名の編集スタッフと320名の執筆者が動員され、「ステンレス鋼の製造、使用に関する理論ならびに技術の集大成を行うこと」を基本方針として改訂作業が進められた。紙面も従来のA5サイズからB5サイズに大型化され、ページ数も増加した。その結果、新しい版に盛り込まれた内容はおおざっぱに見積もって旧版の2倍近くになった。

構成は第2版と類似しているが、各編各章の内容がそれぞれ更新・充実されるとともに、[材料の基礎編]が金属組織、物理的性質、力学的性質を記載した(I)と、主に腐食特性に関連した(II)に分けられ、また、[資料編]には各種ステンレス鋼の物理的性質、機械的性質、状態図、析出・破壊線図、粒界腐食感受性線図などのデータが図面の形で掲載されていて利用しやすくなっており、技術者、研究者にとって大変有用な便覧である。ただ個人購入者にとっては5万円を越える価格が高すぎる感は否めない。

(東北大学金属材料研究所 谷野 満)